

美術の窓(27)

シルクロードの絵画展を終了して

大和文華館館長 吉川 逸 治

この度の展覧会は、西北インド、中インド、中央アジア、中国、朝鮮、日本へと仏教絵画の伝達した痕をたどる意図をもって、かの記念すべき大谷探険隊の齎した貴重な遺品のうち、絵画を中心として展示することを心掛け、これらを補完するため、他のギジル其他の優れた断片と、原作品の滅失したものも幾点か指摘される大きな模写壁画を陳列し、最後に昭和十年前後、便利堂が多額の経費を投じて遂行した法隆寺壁画十二幅の原寸大コロタイプの展示を遂行しました。

この特展で、東京国立博物館の村山松雄館長の御好意で、借覧を許されたクチャ出土の舍利容器は、大きさとその鮮やかな彩色装飾の優秀さとを以って、世界にこの種の作例では群を抜く逸品でありますので、その鑑賞の機を得られた方々から絶大の讃辞をいただき、主催者として、重ねて村山館長の御厚意に深謝を致す次第です。

容器の円蓋部の斜面をなすところは、連珠文で飾られた円輪形を四個配列し、各々の間に双鳥文を挿入し、円輪門には、ヴォリューム豊かな有翼童子を納める。赤地色はギリシア・ローマ伝統、童子は、ギリシアよりむしろローマ流の自然主義のデッサンで、交互に暖黄色と暗緑色に彩られて、連珠文の円輪形や、喙に珠網をくわえる双鳥文とともに文様装飾に対するイーラン趣好を示す。純然たる

ギリシア・ローマ古典画ならば、童子も明暗調のみで充分形姿を満たすのだが、輪部に鉄線描を採用するのはオリエント流の導入で、光沢ある色彩の鮮やかさ、明暗・寒暖二調の対照法も、むしろ図様装飾性が自然主義を圧倒して、オリエントあるいはイーラン流である。また、円珠文のみならず、紐組文など挿入される様々の図様モチーフもイーラン流である。

円胴部の様々の楽器を持った着衣人物の補色関係を強調した色彩の平塗による平面的な姿勢は、イーラン描法をよく示すもので、しかも、ローマ流の古典伝統を生かして、バックから巧みに人物を浮出させ、動勢のリズムに、東西描法を融合させる。

クムトラ石窟の塑造菩薩像頭部の白く塗られた顔面も、東西彩色法の結合を簡潔に示す点で見逃せない。白一色に塗られた顔に、黒線で眉や眼の周囲、髪の毛、髯を記し、朱線を眼瞼にいれ、口唇を染める。黒線、朱線は自然らしさと明暗調子を要約する。これもギリシア・ローマ古典描法とオリエント描法の結合で、オリエントでは、キリスト教絵画がこの方式で描かれ、古代ローマ美術の自然主義を幾何学主義で浄化する。

また、舍利容器の裸童は、帝政ローマの豪華な石造円筒形墳墓の上縁部を飾る太い花綱の波状模様を担ぐ石彫像から派生したものだ

が、この円蓋の装飾をスツーパーを納めた円蓋の門壁にフレスコ画として描いた例は、ミーラン遺跡から幾つも発見され、その一例に作者の名がタイトウスと読まれると指摘され、一際西方古典美術との関係が密接に感じられる。画風は、明暗調彩色法に鉄線描を施したオリエント的古典描法であるが、象のジャータカ伝の図になると、描線が主となり、彩色も平塗が目立ち、東方化が一段と明確に示される。展覧の例でも、童子の顔の描線が力強く、しかし弾力ある描線で生感の活気を示し、バックの赤色の残りも当初塗られたボンベイ赤を想起させる。

注目すべきは、ハイライトを担当する白線、白点、白斑で、顔の眉や鼻梁に添って細い白線を引く。このハイライトは、陰影部を示す褐色、暗褐色、黒などの線や斑点の傍に彩られるのが通例で、明暗二色を併せて、他の部分との調子を揃える必要があるから。ギリシア・ローマの自然主義技法によって、遠近景観のうちに対象を配置し、物体の立体描出を絵画の必要条件として学んだ以上、これらの古代以後の壁画は、壁面の平面性を尊重しながらも、立体描法や明暗彩色法や遠近描法の教程を適用することを決して忘れない。

例を挙げれば、よく知られる遠近法描法とは、遠近法や短縮法でものを立体的に描出す習慣を



クチャ出土 舍利容器

忘れず、しかも全体画面の平面化、儀式化の新傾向と適用するために考案された製図法で、近代では立体画派のアンドレ・ロットやドロネー、メサンジェたちが画面のなかに盛んに取入れる。平面的絵画の主張がナビ派によって提唱されると、その上に、ぼかしのない原色の強い色を使用し、太い線を乱用することも、近代の野獸派が盛んに適用し、ゴッガン、ゴッホ、ブラマンク、マティスなどと近代画の推進者たちの作品が眼前に浮んでくるが、事実、彼等の平面性の絵画、描線の尊重、色彩性の主張など、わが浮世絵芸術に喚起された過去の中世絵画の本質を顧み、それに復帰せんとする一つの試みとも見られ、東西の離れ離れに発展した絵画が、近代にいたって、浮世絵、琳派の刺戟を契機として相接近し、相理解しだしたとも見られるか。

遠近法を平面的に歪曲して適用しながら、絵画的には安定性、明示性、儀礼性などの利点を獲得したのが、遠近法であって、高貴な人物の坐像から、都城や風景のうちにさかんに適用されて、奇妙に感ぜず、却って自然に受容する習慣が長い年月のうちについています。仰観図とか展開図も、遠い古代の原始絵画のそれは全く別の意味をもった観念性の主張を示すものと見なければならぬ。

さて、明暗とか色彩とかの関係



同 蓋部分 有翼天使像



同 身部分 太鼓をたたく人物



クムトラ石窟 塑造菩薩像頭部



ミーラン第五寺址 有翼天使像

も同様であって、絵画の平面性と称する基本的性格を尊重するとなると、平面的絵画の純血さ、本格さが敬意をもって受容せられ、単純な眼鏡絵程度の遠近図は幼稚なものとして認められる。であるから、透視図法の適用者は、始めから自己の苦心と人々の洞察を考慮しつつ、消失点の複数性を画家として思うままに創案しながら、色彩性とか、明暗性とか、自己の好むままに、調整し、制約しつつ、絵画作品を作り上げ、定着させる。その場、画家個人の強い性格で決定される場合もあれば、群なす画家団体の世代から世代への伝承による場合もある。多くは、両者の競合から、何流とか何派と名づけられる絵画が生れ、固定化し、末流現象に終る。

シルクロードの絵画は、人物、諸物の自然態の写実さの自由な技術を修得し、緻密さ、的確さから自由奔放さ、略筆、戯画にまで至ると、時世は自由な個人主義から(タイラントの政治もその一端かも知れないが)、集団的な宗教性を求める傾向が現れ、絵画も自然主義の写実より、ある精神主義の定着した表現を案出してくる。

古典絵画では無視された硬い描線、鉄線描がふたたび原始絵画のごとく採用され、固い輪郭線で形像を簡単に描出し、定着させる。古典古代社会の教養人には、かかる単純な強圧的なデザインには嫌

悪を感じたに相違ないが、時世の宗教感情や、政治制度は一定の精神内容を定着させる必要がある。

これまで、数多くの民族は、自然神として、定着した民族の神々体系を作り上げ、それぞれ、超人的な威力を示す怪物、怪人、怪鳥、例を挙げれば、獅子や牡牛の体軀に人面をつけ、鷲の翼を有するなど。巨大な蛇が翼を羽ばたき空を飛び、海を潜り、青年男女を人身御供として要求する。貧しい人が、鍛練した逞しい体軀と智恵に優れた古代ギリシア人は、様々の怪物退治が古典への第一歩だった。知性にもとる怪物退治の勇敢な戦士たちは、白黒の幾何学的描線で、彼等の悪神との闘争のドラマを描くことから始める。

彼らの模様も幾何学形の直線図様の渦巻が基本である。それが、邪悪を征服すると、勇気ある人間の剛力に自信をもって、人間を中心に周囲の自然を観察しながら、描写し、これまでの世界中の民族が縛られた「正面性」の法則から自から解放され、自然主義の絵画を作り、周囲の自然を幾何学的空間の構成のうちに的確に表現し、肉体の立体性も、自から明暗度の示す立体性のうちに運動も、その自由自在に描写する。

ギリシア人が古典絵画を仕上げた紀元前四世紀は、彼らの文学も、思想も古典性を大成し、これらを獲得した誇りと威力をもって、青

年アレクサンドロスは、広いオリエント諸民族を征服したあげく、中央アジアに軍を進め、インド世界の西北端まで達し、他方、草原と山嶽の中央アジアのまんなか後にバクトリア王国を名のる彼らの部族を植民させ、アレクサンドロス自体は、つねに闘戦しつつ、軍を返して、バクダッドに死するが、その代り、古典文化なるものをオリエントからインド世界、中国、朝鮮、日本にまで伝播させ、その運び手として、仏教とその文化が担当する。古典文化は、文化が思想を容れるに適當なところまで成長せねば、伝染しない。そこで文章とともに美術も成育する必要があった。

古典絵画は、シルクロードに沿って、仏教の文章を伝達するため、すでに述べた如く、伝達の核心となる人体像を確乎たる形像とするため、鉄線描が必要であった。次いで色彩は明暗調でばかすより、明確な色彩で形像を固定する必要が大切であり、色彩は細かく分割して塗れば、それだけ同数の形体単位に分割、解体される(とナビ派の主張通りなれば)。同じ色を平塗りにして形を固定させる必要に应ぜねばならず、しかも、形像の立体観、空間の遠近を識った教養ある人類は、立体性ある人、諸物の形像を提示するため、明色から暗色へ、あるいはその逆方向に同系統の色彩の層を並列する方法、即

ち縹緗彩色の方法を案出し、また同時に明るい暖色、暗い寒色を意識して、注意深く対称的に使用し、それぞれ色彩の明瞭な効果を發揮しつつ、立体、遠近で画面を充実させるのである。だから、縹緗彩色は、発案当初は単なる花模様などの彩色法に限定されるべきものではなく、衣服、武具、草木、山野、雲、空、水など、画面全体に適用されるべきもの。

文が外部景色を描写するものではなく、文はそれ自体のリズムをもって、精神的内容を壮重に唱ずるものである如く、画もまた、線・色・形それぞれ独自の力を發揮しつつ、唱和して精神的内容を響きわたらせるものである。あるいは紙布の上に、あるいは壁面、埴面に。それ故、絵画は独特のリズム、即ち図様装飾的性質を有することとなって、所謂、一連の新しいフォルマション、他方から見ればデフォルマションを作りながら新しい創造に着手す。これがシルクロード絵画の興味あるところで、数々の作例が多様な工夫苦心を重ねて、多種の実を結ぶ。当館蔵の「毘沙門天像」、クチャの「涅槃図」の縹緗染色、キジルの「仙道王と王妃の本生譚」同じくキジルの「分舍利物語」の色彩の暖寒、明暗の配分、ベゼクリクの鉄線描の徹底とそれぞれの努力が面白い。そして、隋唐の仏画、法隆寺の壁面の到達した新しき仏画古典様式の卓越した資質に驚倒される。

季刊 美のたより No.83

昭和 63 年 5 月 27 日

発行 大和文華館